

第3群（活動報告）

保健・医療通訳サポーターを活用した外国人結核患者の支援について

○ 仙南保健福祉事務所 疾病対策班 主任主査 和泉かほる
新澤緑

キーワード：外国人 結核 保健・医療通訳サポーター

I はじめに

結核蔓延国から来日した外国人が、結核を発症し、日本での治療を余儀なくされている。日本語力の低い外国人患者に、日本での結核治療システムや日常生活指導の内容を理解してもらい、円滑に治療につなげるため、保健・医療通訳サポーターを効果的に活用する方策について提案する。

II 方法

平成27年と平成29年に仙南保健所管内で結核発生届のあった外国人結核患者4人のうち、保健・医療通訳サポーターを活用して支援した3人について、支援記録や保健師の経験を書き起こしたものを検証し、保健・医療通訳サポーターの活用について得られた知見を整理した。

III 活動内容

結核発生届のあった外国人患者のうち、日本語をまったく理解できない患者や母国と日本の違いに戸惑いが大きかった患者、3人に対し、結核に対する正しい知識を理解し、納得して治療に専念できるように、保健・医療通訳サポーターを活用した支援を行った。

支援記録の確認や保健師の経験の書き起こしにより、「保健師の行ったこと」「患者や医療機関、保健・医療通訳サポーターの困りごとや不安」「保健・医療通訳サポーターを活用したメリット」を抽出したところ、以下の結果が得られた。

- ① 外国人結核患者や医療機関は、「言葉の壁」や患者の母国と日本の「宗教・文化」や「医療内容」、「保健・医療・福祉制度」の違い等により様々な困りごとや不安を抱えていた。
- ② 保健・医療通訳サポーターを活用することによって、患者の困りごとや不安を把握して軽減できたり、保健・医療通訳サポーターから患者の母国の習慣等の情報提供を得られ、生活指導に活かしたりできるなどのメリットがあった。
- ③ 保健・医療通訳サポーターも、結核についての専門知識の不足等、通訳するにあたり困りごとや不安があった。
- ④ 保健師は、患者や支援者の困りごとや不安を早期にキャッチし、患者と医療機関、保健・医療通訳サポーターをつないだり、伝えたいことが正確に伝わるよう、きめ細かな支援を行ったりしていた。

IV 考察

外国人結核患者は、結核の治療について、国の医療状況や文化等の違いから、受容できなかつたり、軽くとらえたりする場合もある。そのため、母国語で結核について説明され、十分に自らの状況を語ることが、服薬完遂にむけて必要である。

保健・医療通訳サポーターを効果的に活用するためには、患者や支援者の困りごとや不安を早期にキャッチし、すぐに対処することや、きめ細かな打合せと情報提供が必要である。

保健・医療通訳サポーターとしての経験をきっかけに、MIA（公益財団法人宮城県国際化協会）ではメディアカル勉強会が発足した。我が県における外国人結核患者支援を充実させるため、これらの勉強会への支援などに県として積極的に関与していくことが望まれる。また、県内での外国人結核患者の事例を集積し共有する場が必要である。

V おわりに

外国人結核患者の支援において、保健・医療通訳サポーターの活用は非常に有効である。我が県における外国人結核患者支援の充実のため、県として通訳者の勉強会等への支援や事例の共有などの取り組みが必要である。

VI 引用・参考文献

- 1) 発病のしくみ 森亨監修「結核—古くて新しい病気」大塚製薬WEBサイトより
https://www.otsuka.co.jp/health-and-illness/tuberculosis/pdf/kekaku_all.pdf
- 2) 主な抗結核薬 公益財団法人結核予防会ホームページより
- 3) 抗酸菌標準治療 独立行政法人国立病院機構 東徳島医療センターホームページより
- 4) WHO Global Tuberculosis Report 2016 より
- 5) 外国人労働者新聞 2017年1月版より